

コメント

あの日あの時、何が話し合われていなかったか

井上 研

(名古屋大学 大学院情報科学研究科)

本稿では、研究会に参加して自分が考えたこと述べつつ、あの場でもっと議論していただきたかったなあとと思う点を二点、また今後のてんむすフィールド研究会の展開に期待し、次にやっていただきたいと思うことを一つ挙げることにする。

1. 質的研究は本当に科学じゃないの？

発表者のお二人は割とあっさり「科学でなくてもいい」や「脱科学」ということを述べておられたが、この結論をまだ出すのはまだ早いと思う。もっと丁寧な議論が必要であろう。伊勢田先生の仰るように、科学と疑似科学との間に明確な境界線を引けるような唯一の基準というものはない。ましてや質的か、量的かということが科学と疑似科学を分ける基準であるとは思えない。なぜか。

まず、荒川さんは、量的研究は研究者の感覚や主観を排した研究法を用い、数量化、客観化、機械化、解釈の排除、演繹という概念で特徴づけられるとし、一方質的研究はインタビューの抜書きや、観察した結果の分類などを用いる研究法で、帰納的、全体的、現場密着的、社会構築主義的、真実を求めるというよりは視点の増加を目指す、というふうに特徴付けておられる。そして両者をこのように特徴付けた上で、質的研究と量的研究の違いを強調されるのだが、私にはこの違いは単に方法の違いにすぎないと思える。それに違いばかりがあるわけではなく、同じ点もある。そしてその同じ点の方が重要だと思う。すなわち、質的な研究だって、世界に生じている何事かを記述し理解し、われわれの知識を増やそうとする点では量的な研究と変わらない。

また、違いを強調して、質的研究は量的研究とは異質だから科学じゃなくても良いのだとする主張は、量的研究こそがザ・科学なのだ、という質的研究を批判する側の主張に乗ってなされているように見えるが、そのような近視眼的な主張に乗る必要はないだろう。

伊勢田先生が指摘されているように、むしろ必要なのは、知りたいことがあるにもかかわらず、そのことを（お金や時間がないからとかではなく）計量的に研究する手法がない場合における、お前（つまり量的な研究をしている人）はこれを統計的な手法では明らかにできないだろうという開き直りの態度である。

統計的な手法では知ることができなさそうな領域が存在するのは明らかである。そのような領域の存在を認めさせて、こっちだって科学的手法なのだという立場を何故取らないのか、という点をもっと聞けばよかったなあ、と今考えて思うのである。

2. 上の提案をどう思うか。

今上述したような提案、つまり、われわれが知りたいことであるにもかかわらず、適当な計量的手法が存在しない領域があり、その領域では質的研究こそが科学的手法なのだと思えるべきなのでは、という提案（これは研究会で伊勢田先生が出された提案である）についての反応が、研究会の場ではあまりなかったように感じられた。

このような提案について質的研究をしている研究者はどのように考えるのか。「君の研究は科学ではない」という言葉を投げつけられて気持ちがふさぎこんでいる研究者にとって、それは光明なのか、そうではないのか。

これも今思えばもっと議論していただきたかった話題である。

3. 量的研究をしている研究者との対決。

そして最後に、今観たいカードはこれである。殴り合いが見たい、というのは冗談だが、研究会で発表された方々は哲学者である伊勢田先生を除き、どなたも質的研究の側に立っていらっしゃる方であった。そのために、量的研究の特徴づけにどうも偏りがあるのでは、という思いが拭い切れなかった。だから、質的研究をしている人と量的研究をしている人が一堂に会し、それぞれ自分たちがやっている研究のことを自分たちでどう考えているか、そして相手がやっていることをどう考えているかを聞いてみたいのである。

質的研究をしている人には、量的研究をしている人が言う「科学ではない」というその言い分についてもっと深くつっこんでいただきたい。どういう点で科学的ではないのか。あなた方は科学というものをどう考えているのか。そんな近視眼的な科学観でよいのかなどなど。

科学的な営みの何たるかについて興味を抱いている科学哲学者としては、このマッチアップが実現すればとても面白いことになりそうだという予感があるのだが、現場の研究者にとってはどうなのだろうか。